

久間議員に聞く

久間議員は総合電機メーカーでの研究開発、マネジメントの経験をいかし、内閣府の総合科学技術・イノベーション会議 (CSTI) 議員として精力的に活動している。SIP*1、ImPACT*2のガバナリングボード座長や、「第5期科学技術基本計画」策定を牽引するなど、科学技術政策のキーマンである久間議員に、CRDSへの評価と今後の期待を聞いた。

第5期科学技術基本計画策定でCRDSが果たした役割

安倍政権は科学技術イノベーションを、経済再生・成長の原動力と位置付けています。総合科学技術会議を改組し、「イノベーション」を加えてCSTIとしたのも、安倍総理の科学技術に対する強い期待とリーダーシップによるものです。

2016年4月から実行段階に入った「第5期科学技術基本計画」は、科学技術イノベーションの創出を加速するために、CSTIが初めて本格的に産業界、アカデミアと一緒に策定したものです。本計画ではめざすべき社会の姿を、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させることで、経済的発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会とし、「Society 5.0」と名付けました。この概念は、CRDSと産業界との議論によって生み出したものです。岩野首席フェローの“REALITY 2.0”を始め、CRDSからは多くの提案をいただきました。

Society 5.0は、10年前に、当時のCRDSセンター長だった生駒俊明先生が中心になり提唱したIRT (Information and Robotics Technology) と類似した概念です。

センサーにより情報を得て、サイバー空間でその情報を処理し行動計画を立てて、ロボット等を用いてフィジカル空間を制御するという世界を描きました。このコンセプト策定には、私も参画しました。今のIoT、CPSの概念とかなり近いのではないのでしょうか。ところが、当時は受け入れられなかった。10年後の現在、欧米に先行されたことで、やっとSociety 5.0として注目されていますが、IRTが社会に受け入れられていれば、日本が世界をリードしていたでしょう。大胆で新しい考えを受け入れにくいのが、日本の



一番の問題点だと思います。

今後のCRDSに望むこと

CRDSの素晴らしさはなんといっても人材です。素晴らしいセンター長やフェローが揃っている。しかし、分野相互のつながりや、産業界との連携は一層強化する必要があります。

そしてCRDSには文科省関連の1組織から脱皮して、日本全体の将来を考えるシンクタンクになってほしい。そのためにも、産学官の垣根を越えてイノベーションを起こす枠組みを作るなど、経産省や他の省庁、産業界も巻き込んで、一層活発に活動してくれることを期待しています。

久間 和生 (きゅうま かずお)

内閣府総合科学技術・イノベーション会議 議員

1972年東京工業大学工学部電子工学科卒業、77年同大学大学院博士課程電子物理学専攻修了。工学博士。同年三菱電機株式会社入社、光ファイバセンサー、化合物半導体光デバイス、光ニューロチップ、人工網膜チップ、画像処理システムなどの研究開発と事業化を推進。2003年先端技術総合研究所所長、06年常務執行役開発本部長、10年専務執行役半導体・デバイス事業本部長、11年代表執行役副社長、12年常任顧問。13年より現職。

*1:戦略的イノベーション創造プログラム (Cross-ministerial Strategic Innovation Promotion Program)

*2:革新的研究開発推進プログラム (Impulsing PARadigm Change through Disruptive Technologies Program)